

「給食の奇蹟」

マタイ 14:19～21、15:35～38

マルコ 6:39～44、8:6～10

ルカ 9:14～17

ヨハネ 6:10～13

はじめに

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。(マタイ 5:17)」

「時が満ち、神の国は近くなった。(マルコ 1:15)」

これはイエシュアの宣教活動の第一声です。イエシュアはこの言葉から全ての働きを始められました。すなわち天の御国、神の国を告げ知らせることがイエシュアの目的、使命でした。イエシュアの語られた多くのたとえ話は天の御国、神の国に関するものでした。だとすれば、イエシュアがなされた多くのしるしと奇蹟もまた然り、天の御国、神の国を指し示すためのものであったと考えられます。今回は四つの福音書全てに記された「五千人の給食の奇蹟」と、それに付随して「四千人の給食の奇蹟」を取り上げ、天の御国とは、神の国とはいかなるものなのかを考えてみたいと思います。

「五千人の給食」

1. 文脈

まずこの奇蹟が、どのような文脈の中に記されているのかを考えてみたいと思います。マタイとマルコの福音書はいずれもこの奇蹟の前にバプテスマのヨハネがヘロデによって殺される出来事が記されています。またルカの福音書はそれとよく似ていてこのような記述です。

【新改訳改訂第3版】

ルカ

9:7 さて、国主ヘロデは、このすべての出来事を聞いて、ひどく当惑していた。それは、ある人々が、「ヨハネが死人の中からよみがえったのだ」と言い、

9:8 ほかに人々は、「エリヤが現れたのだ」と言い、さらに別の人々は、「昔の預言者のひとりがよみがえったのだ」と言っていたからである。

9:9 ヘロデは言った。「ヨハネなら、私が首をはねたのだ。そうしたことがうわさされているこの人は、いったいだれなのだろう。」ヘロデはイエスに会ってみようとした。

これはイエシュアについての人々のうわさが記されている箇所ですが、バプテスマのヨハネが死からよみがえったとか、エリヤのような昔の預言者が現れたというようなことが記されています。そしてヨハネの福音書も

またバプテスマのヨハネの記述があります。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

5:33 あなたがたは、ヨハネのところに人をやりましたが、彼は真理について証言しました。

5:34 といっても、わたしは人の証言を受けるものではありません。わたしは、あなたがたが救われるために、そのことを言うのです。

5:35 彼は燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で楽しむことを願ったのです。

5:36 しかし、わたしにはヨハネの証言よりもすぐれた証言があります。父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしがやっているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているのです。

またこのような記述もあります。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

5:46 もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。

5:47 しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう。」

このように、「五千人の給食の奇蹟」は、バプテスマのヨハネを中心に記した流れの中にあることが解ります。その他エリヤ、昔の預言者、それにモーセという名前も記されていました。いずれも旧約聖書の預言者たちです。このバプテスマのヨハネも旧約聖書の預言者です。なぜなら彼は自分を指してこう言っていたからです。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

1:23 彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」

イザヤは当然旧約の預言者です。その「声」であるというヨハネもまたそうであると言えます。これらの記述から、「イエシュアは、バプテスマのヨハネをはじめとする旧約聖書の預言者たちの結果的、結実的存在である」ということが示されていると考えられます。この結論を踏まえて「五千人の給食の奇蹟」の内容を見る必要があると考えられます。

2. 五つのパンと二匹の魚

「イエシュアは旧約聖書の結実的存在である」という文脈から考えるならば、五つのパンと二匹の魚が何を

指し示しているのかを次のように解釈することができます。まず五つのパンですが、これは文脈にもあったヨハネ 5:46、47 がヒントになると考えられます。すなわち「モーセの書」です。モーセの書とは創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五つを指します。「モーセが書いたのはわたしのことだからです。」とあるように、これらモーセ五書はイエシュアを指し示しており、それが五つのパンにたとえられていると考えられます。そして残る二匹の魚ですが、先ほどのヨハネ 5:46、47 を更に発展させた形で述べられているルカ 24:44 がヒントになると考えられます。

【新改訳改訂第3版】

ルカ

24:44 さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」

モーセの律法すなわち「モーセ五書」、そして「預言者」と「詩篇」、この御言葉から二匹の魚とは「預言者」と「詩篇」を指し示していると考えられます。このように、パンと魚とを分けて解釈するのではなく「五つのパンと二匹の魚」という一つの食物として捉え、それが全て「わたしについて」すなわちイエシュアを指し示していると考えられます。

3. 座る、取る

四つの福音書に記されている奇蹟の内容を以下に並記しました。すると共通する動詞を二つ見つけることができます。

【新改訳改訂第3版】

マタイ

14:19 そしてイエスは、群衆に命じて草の上にすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。

マルコ

6:39 イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。

6:40 そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。

6:41 するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた。

ルカ

9:15 弟子たちは、そのようにして、全部をすわらせた。

9:16 するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福して裂き、群衆に配るように弟子たちに与えられた。

ヨハネ

6:10 イエスは言われた。「人々をすわらせなさい。」その場所には草が多かった。そこで男たちはすわった。その数はおよそ五千人であった。

6:11 そこで、イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしだけ分けられた。

共通する二つの動詞、それは「すわる」と「取る」です。この奇蹟が冒頭に述べた天の御国、神の国を指し示すものであるならば、この二つの動詞は非常に重要であり、共通して使われているのが決して偶然ではないことが解ります。

まず「すわる」という動詞はヘブル語でヤーシャヴ(יָשַׁב)と言いますが、実はその本来の意味は「すわる」ではありません。なぜなら聖書で最初に使われたヤーシャヴは、このように訳されているからです。

【新改訳改訂第3版】

創世記

4:16 それで、カインは、【主】の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。

ここで「住みついた」と訳されているのが、聖書で最初のヤーシャヴです。ちなみにこれはユダヤ人のラビ（聖書の教師）たちが実際に行っているもので「最初の言及の法則」というものです。これは聖書の重要な原理は、長子、初穂、最初に生まれることが基準であり、一番最初に出て来ることの中に本質的なことが啓示されているという原理です。この原理によれば、創世記 4:16 によればヤーシャヴとは「地に住みつく」こと、つまり天の御国、神の国とはいわゆる天国のことではなく、この地上に建てられることが示されていると考えられます。

次に「取る」という動詞についてですが、これはヘブル語でカーラト(קָרָא)と言いますが、これも本来の意味は「取る」ではありません。先ほどと同じく「最初の言及の法則」に従って考えるならばそれは創世記 9:11 になります。

【新改訳改訂第3版】

創世記

9:11 わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」

ここで「断ち切る」の否定形、「断ち切られない」と訳されているのが本来のカーラトの持つ意味です。またそれは「地を滅ぼすようなことはない」ことであると言い換えられています。つまり天の御国、神の国とは永遠に滅びることのない地に建てられることが示されていると考えられます。

4. 五千人

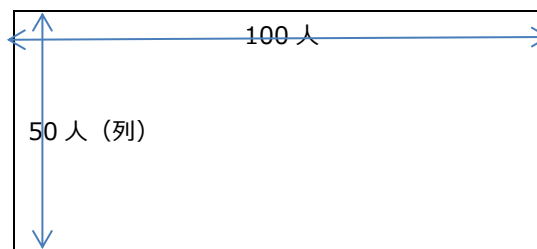
そして肝心の「五千人」、これが指し示すものは何か、そのヒントが以下の記述にあると考えられます。

マルコ

6:39 イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上になすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。

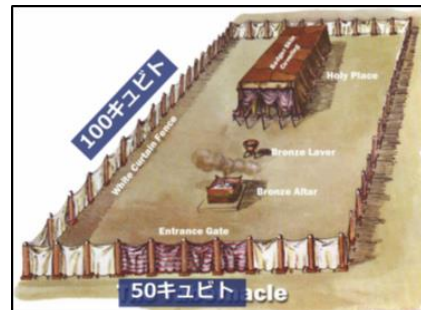
6:40 そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。

「百人、五十人と『固まって』」と訳されていますが、ここで「固まって」と訳されているヘブル語は、シュラー(הַרְבֵּץ)と言い、その意味は「(城壁、石垣のような) 列、並び」です。つまり五千人の人々は無造作に50人から100人くらい、と固まったのではなく、以下のように整列したと考えられます。



50列×100人=5,000人

このように100人50列に並ぶと、イスラエルの民にとって重要なものの形が浮かび上がってきます。それはモーセの幕屋です。モーセの幕屋の外寸は長さ100キュビト、幅50キュビトです。モーセの幕屋とはイスラエルの民が神にいけにえをささげる場所であり、何より神が臨在され、モーセや大祭司を通して神と人とが交わる場所でした。天の御国、神の国とはまさに神が人とともに住み、交わることであり、つまりこの「五千」という数字には、天の御国、神の国がモーセの幕屋に示された、神と人との関係を示すものであると考えられます。



5. 十二のかご

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

6:12 そして、彼らが十分食べたとき、弟子たちに言われた。「余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。」

6:13 彼らは集めてみた。すると、大麦のパン五つから出て来たパン切れを、人々が食べたうえ、なお余ったもので十二のかごがいっぱいになった。

集められた十二のかご、これはイエシュアがどのような使命を受けて遣わされた御方であるかを考えれば、以下の御言葉がヒントになると思われます。

【新改訳改訂第3版】

マタイ

15:24 しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません」と言われた。

イエシュアは「イスラエルの家の失われた羊」を探し、呼び集めるために御父から遣わされた御方です。イスラエルの家とは、アブラハムの子イサクの子ヤコブの12人の息子たちからなるイスラエルの12部族を指し示すと考えられ、終わりの日にそれが成就することが数多く預言されています。

【新改訳改訂第3版】

イザヤ

43:5 恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしは東から、あなたの子孫を来させ、西から、あなたを集める。

49:5 今、【主】は仰せられる。——主はヤコブをご自分のもとに帰らせ、イスラエルをご自分のもとに集めるために、私が母の胎内にいる時、私をご自分のしもべとして造られた。私は【主】に尊ばれ、私の神は私の力となられた。——

54:7 「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。

56:8 ——イスラエルの散らされた者たちを集める神である主の御告げ——わたしは、すでに集められた者たちに、さらに集めて加えよう。」

エレミヤ

29:14 わたしはあなたがたに見つけられる。——【主】の御告げ——わたしは、あなたがたの繁栄を元どおりにし、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める。——【主】の御告げ——わたしはあなたがたを引いて行った先から、あなたがたをもとの所へ帰らせる。」

31:8 見よ。わたしは彼らを北の国から連れ出し、地の果てから彼らを集める。その中には目の見えない者も足のなえた者も、妊婦も産婦も共にいる。彼らは大集団をなして、ここに帰る。

エゼキエル

20:34 わたしは、力強い手と伸ばした腕、注ぎ出る憤りをもって、あなたがたを国々の民の中から連れ出し、その散らされている国々からあなたがたを集める。

20:41 わたしがあなたがたを国々の民の中から連れ出し、その散らされている国々からあなたがたを集めるとき、わたしは、あなたがたをなだめのかおりとして喜んで受け入れる。わたしは、諸国の民が見ている前で、あなたがたのうちに、わたしの聖なることを示す。

28:25 神である主はこう仰せられる。わたしがイスラエルの家を、散らされていた国々の民の中から集めるとき、わたしは諸国の民の目の前で、わたしの聖なることを示そう。彼らは、わたしがわたしのしもべヤコブ

に与えた土地に住みつこう。

ミカ

2:12 ヤコブよ。わたしはあなたをことごとく必ず集める。わたしはイスラエルの残りの者を必ず集める。わたしは彼らを、おりの中の羊のように、牧場の中の群れのように一つに集める。こうして人々のざわめきが起ころう。

ゼパニヤ

3:19 見よ。その時、わたしはあなたを苦しめたすべての者を罰し、足のなえた者を救い、散らされた者を集める。わたしは彼らの恥を栄誉に変え、全地でその名をあげさせよう。

3:20 その時、わたしはあなたがたを連れ帰り、その時、わたしはあなたがたを集める。わたしがあなたがたの目の前で、あなたがたの繁栄を元どおりにするとき、地のすべての民の間であなたがたに、名誉と栄誉を与えよう、と【主】は仰せられる。

このように、イスラエルが「集められる」という預言は数多く、聖書において「集められる」と言えばイスラエルなのです。ですから結論として、イエシュアの「五千人の給食の奇蹟」が示す天の御国、神の国とは、イスラエルの家の12部族を集めることに集約されると考えられます。

「四千人の給食」

1. 文脈

続いて「四千人の給食の奇蹟」について考えます。この奇蹟はマタイとマルコの二つの福音書にのみ記されています。そしてそのどちらもこの奇蹟の前に記されているのは、イエシュアがツロとシドン、すなわち異邦人の地に行かれた時の出来事です。

【新改訳改訂第3版】

マタイ

15:21 それから、イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に立ちのかれた。

15:22 すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」

15:23 しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。そこで、弟子たちはみもとに来て、「あの女を帰してやってください。叫びながらあとについて来るのです」と言ってイエスに願った。

15:24 しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません」と言われた。

15:25 しかし、その女は来て、イエスの前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください」と言った。

15:26 すると、イエスは答えて、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです」と言われた。

15:27 しかし、女は言った。「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはい

たきます。」

15:28 そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」すると、彼女の娘はその時から直った。

カナンの女はイエシュアを「主よ。ダビデの子よ。」と呼びました。これはメシアの別称です。これを知っているということは、彼女は異邦人でありながらも旧約聖書の預言を理解しており、またイスラエルの神を信じているということです。これは私たち異邦人クリスチャンの「型」だと考えられ、この文脈の流れで記されている「四千人の給食の奇蹟」は、先ほどの「五千人の給食の奇蹟」がイスラエルの視点で天の御国、神の国を指し示しているのに対して、このカナンの人の女に象徴される「異邦人の教会、クリスチャン」的視点、新約的視点で指し示そうとしていると考えられます。ちなみにルカの福音書とヨハネの福音書にはこの奇蹟の記述はないのですが、それぞれの「五千人の給食の奇蹟」の後の記述が、異邦人の教会を指し示しているように感じられます。それは以下の記述です。

【新改訳改訂第3版】

ルカ

9:18 さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」

9:19 彼らは、答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています。」

9:20 イエスは、彼らに言われた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えて言った。「神のキリストです。」

これがルカの福音書の「五千人の給食の奇蹟」の後に記されている内容です。イエシュアを「神のキリスト（メシア）」と告白するのが教会、クリスチャンです。初代教会は弟子たちが聖霊を受け、「あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。(マタイ 16:18)」とイエシュアに言わしめた、このペテロが立ち上がった時から始まりました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

6:14 人々は、イエスのなさったしるしを見て、「まことに、この方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。

6:15 そこで、イエスは、人々が自分を王とするために、むりやりに連れて行こうとしているのを知って、ただひとり、また山に退かれた。

ヨハネの福音書の「五千人の給食の奇蹟」の後の結末がこれです。イエシュアがユダヤ人たちから離れて行かれる様子が描かれています。異邦人の教会とは、イエシュアの福音がユダヤ人たちに受け入れられず「退けられた」ことで世界中に広がっていきました。使徒パウロはユダヤ人たちにこう言っています。

【新改訳改訂第3版】

使徒の働き

13:46 そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。」

このようにルカとヨハネの福音書も、記事としては「四千人の給食の奇蹟」について取り扱っていないにしても、後の文脈でそれぞれの形で異邦人の教会、クリスチャンを指し示していると考えられます。

2. 七つのパンと少しの魚

これは「五千人の給食の奇蹟」と同様、旧約聖書に記されたイエシュアについての御言葉と考えるべきだと思います。「五つのパンと二匹の魚」も指し示している数は同じ「七」ですし、パンと魚という、食べ物としての内容も同じです。全く別のものとする必要はないと思われます。ユダヤ人にとっても、異邦人にとっても天の御国、神の国に入るために必要なことはイエシュアを食べる、受け入れることなのです。そしてイエシュアが何をなし、何をなさそうとしておられるのかを知るには、旧約聖書の土台が必要だということが示されていると考えられます。

3. 四千人

この「四千人の給食の奇蹟」が異邦人の教会的視点、新約的視点であるとすれば、この「四千」は東西南北の「四方」、すなわち福音を伝えるべき全世界を表す「四」、またはイエシュアとその弟子たちの物語であるマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの「四」福音書を指し示していると考えられます。そして「千」は黙示録 20 章の記述がヒントとなると考えられます。

【新改訳改訂第3版】

黙示録

20:4 また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。

20:5 そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。

20:6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

キリストすなわちメシアであるイエシュアは、イスラエルの王であるだけでなく、「四」福音書に象徴される、イエシュアと弟子たちがともに「四方すなわち全世界」の王となることが、この「四千」という数字に表され

た天の御国、神の国だと考えられます。

4. 七つのかご

この七つのかごもまた「集められる」ことが重要なヒントだと考えられます。十二のかごがイスラエルの家の12部族であるならば、この「七」は黙示録に記された「七つの教会」であると考えられます。

【新改訳改訂第3版】

黙示録

1:19 そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。

1:20 わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

このように「七」とは教会を指し示す数字であると考えられます。そしてこの教会が集められるという預言であると考えられるものがこれです。

【新改訳改訂第3版】

I テサロニケ

4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

イエシュアの地上再臨の前に起こると考えられる空中再臨、空中携拳は、キリストすなわちメシアの花嫁である教会が集められる時です。そもそも教会という存在自体が、集められるという意味と性質を持っていますが、それはあくまでもこの預言の「型」であると考えられます。

【新改訳改訂第3版】

黙示録

8:1 小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった。

8:2 それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。

8:3 また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。

8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

この黙示は、果たして同じ空中携拳を指し示したものであるのかまだまだ検証しなければなりません、「七」が多用されていること、「聖徒たち」、「立ち上る」など空中携拳を思わせる言葉があり、文脈的にもまだまだ検証の余地は大いにありますが参考程度に挙げておきます。

おわりに

以上、イエシュアの代表的な奇蹟であるこの「給食の奇蹟」の中に、モーセ五書から詩篇、預言書、そして四福音書を経て黙示録までと、天の御国、神の国という視点においてまさに聖書全体を網羅するような仕掛けがあるという結論に至りました。つまりこの「給食の奇蹟」を悟ることは、聖書全体を理解することであり、神のご計画である天の御国、神の国と、それを成就されるイエシュアを理解することであると考えられます。ですからこの奇蹟は、四福音書のどれもが記した唯一の奇蹟として存在するのだと思われます。そして以下の記述から、イエシュアは弟子たちがこの奇蹟の意味を悟ることを、強く求めておられるように感じられます。

【新改訳改訂第3版】

マルコ

8:16 そこで弟子たちは、パンを持っていないということで、互いに議論し始めた。

8:17 それに気づいてイエスは言われた。「なぜ、パンがないとって議論しているのですか。まだわからないのですか、悟らないのですか。心が堅く閉じているのですか。」

8:18 目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。」

8:19 わたしが五千人に五つのパンを裂いて上げたとき、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」

8:20 「四千人に七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」

8:21 イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。」

神のご計画である天の御国、神の国の視点でこのイエシュアの「給食の奇蹟」の解釈を試みましたが、まだまだ悟れていないように思われます。これからも継続してこの奇蹟を見つめ直し、聖霊の助けによってより深い理解があたえられるように祈ります。